

『石神問答』考―柳田学の揺籃期と『人類学雑誌』

杉原 和佳子

本研究の目的

本研究では、『石神問答』とは柳田にとってどのような本であったのかに迫りたい。そのために、『石神問答』の全体構成・問答者との関わり・書簡に見える柳田の言動から、柳田が『石神問答』に込めた意図に迫る。さらに、『石神問答』への人類学会を主とした当時の民俗学的研究からの評価、弟子たちからの評価、柳田自身の評価を比較し、『石神問答』に見える柳田の研究の視点・方法とその評価の差を考察する。

一 『石神問答』の訓みと先行研究

現在「石神」は、「シャクジン」という訓みを当てる場合は地名、もしくは塞の神の名称のひとつとして使用し、「イシガミ」又は「シャクジ」と当てる場合は、「石神」という神の別の呼び名と考える場合と、「イシガミ」「シャクジ」というそれぞれの神の名と捉える場合があるといえる。『石神問答』の「石神」の部分の訓みは、この「イシガミ」「シャクジ」という訓みのいずれかからあてられている。柳田は『石神問答』の中でシャクジと石神を別個の神と認識しており、石神の訓みを「イシガミ」と当て発音していた。ここから、『石神問答』の「石神」の部分の訓みは「イシガミ」とであると考える。この現在の『石神問答』のタイトルの訓みの揺れからも、『石神問答』が未だ不明な部分が多い書であるといえる。

『石神問答』の先行研究と、柳田民俗学の前史の研究への指摘についてまとめると次のようになる。

篠宮はる子「『石神問答』における柳田国男の視点と方法」(『民族』第62号 昭和40年9月)でシャクジの由来は地境を侵されることを防ぐ鎮護の機能にすべての結果が収斂し、柳田はその証明に成功したと判じている。さらに、柳田の認識の原理が柳田は実態を追求すること、つまり残されている「もの」だけに注目することによって、昔それが考えられた、作られた時の意味を追求していると指摘している。石井正己は『遠野物語の誕生』と「遠野物語の成立過程(上)」において、『遠野物語』に付された頭注と『石神問答』の書簡との「密接な関連」を指摘しながら、両書を「明治四十三年に、聚精堂から相次いで初版が刊行された一セットの本であった」と指摘している。この他、柳田がシャクジを境界に置かれたサイノカミ(塞の神)とみるという発想は、椎葉村での体験や佐々木喜善の伝承群から見出した山人や山民への関心へつながっているという久保田宏の指摘や、『石神問答』を「同学のあいだでおこなわれた、しんぼうづよい論争の記録ではあるまいか」と見

る花田清輝の指摘がある。大塚英志は『石神問答』を柳田の自然主義批判に動機づけられた文学実験の書であり、山人＝台湾山岳民族モデル説を展開したと指摘している。佐野賢治は『石神問答』の書簡集という形態で世に出たことはその後の民俗学の展開と絡めて改めて問う必要があると述べている。

しかし、いずれも『石神問答』の内容紹介や解説、もしくは一部に着目した研究に留まっており、全体を通した先行研究はほとんどなく、『石神問答』を中心として行われた研究もほぼないといえる。

また、柳田民俗学の前史の研究の必要を90年頃から福田アジオ、後藤総一郎により指摘されている。2007年には成城大学の院生三人により『『人類学雑誌』考—民俗学の揺籃期』という題で柳田民俗学と『人類学雑誌』の手法と目的を比較している。

二 『石神問答』について

柳田は、音がある意味をもっているという暗黙の前提のもと、その音の含まれる意味から考察を行い、すべてがシャグジの因由は、地境を侵されることを防ぐ為の鎮護の機能にあるという一点に『石神問答』を収斂させていく。そして、「仮にシャグジは石神の呉音に非ずとするも之を石神と称して些も誤謬なし」という結論に至る。

構成では、『石神問答』の書簡は日付順に配置されており、この日付順の配置、書簡集という形態は、自らの研究道程の推移を読者に示すことが目的だと考える。さらに、追録による補足、表という情報、問答者の提示による研究における人脈と情報源の提示を行った。また、錯綜した内容を分かりやすくするため、概要で書簡の内容を体系的にまとめ、目次の機能をつけるなど読者に配慮をしている。ここから、柳田は『石神問答』を出版する意思が書簡のやりとりを始めた当初からあり、読者を念頭において構成の工夫を行っているといえる。ここから、柳田が『石神問答』を研究書というよりも、その研究の目的や方法を読者に提示することに重点を置いて構成したと考える。

次に、問答者について考察する。山中笑、伊能嘉矩、白鳥庫吉、喜田貞吉、和田千吉の五名は、柳田が構想した研究の情報の収集と、書簡のやりとりをすることで各学界とのつながりの提示、各学界への自らの研究方法の提示と学者たちへの研究の呼びかけのために問答者として設定されたと考える。また、山中、伊能、和田は人類学会に所属しており、白鳥、喜田は『人類学雑誌』で論文の紹介が行われるなど、この五名の問答者は直接的・間接的に人類学会とのつながりがある人物であった。この点から、柳田は『石神問答』の出版に人類学会への意識があったと考える。さらに、柳田は、史学、地理学、考古学、人類学、語学など様々な学問の観点から考察を行い、彼等に自らの方法を提示し研究の呼びかけを行ったといえる。また、伊能嘉矩、白鳥庫吉は台湾や朝鮮といった隣国との比較研究の視点から問答者として選択されたと考える。さらに、伊能嘉矩、佐々木繁は後に出版

される『遠野物語』との関係から問答者として登場した。さらに、柳田は『石神問答』『遠野物語』の順で出版することで、『遠野物語』を『石神問答』で提示した山人の資料として扱うよう意図したと考える。また、緒方小太郎は国学の観点から選ばれ、松岡輝夫は家族への心情吐露という形式のあとがきのために設定されたと考える。

三 『石神問答』と『人類学雑誌』

調査の中で、『石神問答』と同じ日に発行された『東京人類学会雑誌』第25巻第290号の「新著紹介及批評」に『石神問答』の紹介文が掲載されたこと、その二ヶ月後、『遠野物語』出版の一か月後の『東京人類学会雑誌』第25巻第292号に掲載され柳田が『石神問答』を始め度々人類学会に批判を行っていることが分った。そこで、人類学会と『人類学雑誌』の観点から『石神問答』の考察を行った。

現在の民俗学における人類学会及び『人類学雑誌』の評価は、当初の生活習慣に向けた研究の視点は評価しているものの、研究方法は折口信夫の「何の組織も無い蒐集」など批判している。そして、人類学会の生活慣習の研究は好事家の域を出ないものという評価がなされている。しかし、この姿勢の発端には、民俗学の正当性、独自性を主張しようとする意図があり、柳田や折口が行った人類学への批判の態度に通じる。この柳田の批判の姿勢は『石神問答』にも表れており、『石神問答』は始めて単行本として人類学会や当時の学問の在り方を批判したこと、また柳田はこれらを学ぶことによって自らの学問をあたためていたことが分ると考える。

『人類学会総索引』には「民族学」に「石の崇拜」という項目がある。この他、項目には数えられていないが、台湾の石崇拜や隼人石、神籠石に関する論文の掲載が明治40年前半には頻繁に掲載されており、当時人類学会では石に関しての研究が盛んに行なわれていたことが分る。「石の崇拜」では主として出口米吉という人物が研究を発表していた。この出口の研究は、まず外国との比較から行われ、そこから様々な資料を提示するものの体系的考察や結論を出すまでには至っておらず、考察は外国ありきの安易な比較から行われる場合が多い。柳田は「おたま杓子」の中で出口の「飯杓子に対する俗信の由來」が人類学会の用いた石神音訛説に近寄ろうとしていると批判している。出口は道祖神や左義長など柳田と同じ関心を持ちながら、その方法は当時の人類学会の用いた外国との比較研究や情報の収集に重点が置かれていたため、柳田がこの点から出口を避けたと考える。

柳田は、当時の民俗学的研究を行っていた人類学の土俗学やフォクロア、さらに風俗史的記録に自らの研究方法を学んでいたと考えられるが、人類学会の学者が用いた比較研究という方法には非常に慎重であったといえる。そのため、研究の視点や方法を学びながらも、その根本的な研究の思想は全く違うものであったと考える。柳田と人類学会の最大の違いは、日本の事例に焦点をあてた多くの情報からの考察の部分にある。一例から汎称を作り、それを世界全体の風習の一部としようとした人類学会と違い、柳田は地名、語義、

神体などの多くの視点から日本の事例を集め、それらの差異を人類学、考古学、言語学などの様々な観点から検証し、考察しようとしたといえる。

柳田は、先述したこれらの学会を批判、検証しながら学び、資料を得、自らの学問を発展させていった。つまり、これらの学問と着かず離れず、共生するような立場をとったといえる。『石神問答』は柳田が自らの研究をまとめ、示した最初の単行本であり、柳田が学界とつながりつつ、自らの学問を発展させるために戦略的に構成された書物であったと考える。

四 『石神問答』とは何か

最後に、『石神問答』とは柳田にとってどのような本であったのか、柳田の弟子として、昭和4年の雑誌『郷土』「石特輯号」と、その発案者であり、柳田の弟子である折口信夫の文章から考察を行う。

雑誌『郷土』「石特輯号」では、『石神問答』を石の研究と評価している。柳田は『石神問答』の中で当初「シャグジの信仰」をテーマとしていることを考えると、その主題がずれて伝わっており、人類学会の読み方の流れから『石神問答』の認識が変化していないと考えられる。また、弟子たちは『石神問答』が柳田の学問の始まりと考えており、柳田の学問の発端を『石神問答』としている。

折口信夫は昭和7年発表の「石に出で入るもの」の中で、柳田の学問を「ふおくろあ」と表し、その初発の本として『石神問答』を捉えている。これは昭和4年「山中先生の学問」同様、柳田の学問を人類学・考古学的学問の流れを受けた意味で認識していたと考える。折口は『石神問答』の研究が境の神への興味があったからと正確に認識しているが、この講演で折口が扱ったテーマは石誕生の話、うつぼ舟、刀と笛など石にまつわるものばかりであり、『石神問答』の本来のテーマである祠や塚の神、境の神については話されていない。このため、折口が『石神問答』の境の神という研究テーマを理解しながら、その目的である生蕃との隘勇線としての境の神の存在という仮説や祠の神の重要性は重要視しておらず、民俗学の語の使用法の点から考えると、やはり折口も人類学会と同じ石の研究として『石神問答』を読んでいたと考えられる。

結論 柳田にとっての『石神問答』

この書は大きく分けて二つの目的のもと作られたと考える。

一つは学界への視点である。柳田は人類学会を始めとする当時の民俗学的研究への批判と問題提起を行ったと考える。さらに、自らの研究方法を提示することで、新しい方法で

の研究を他の研究者へ呼びかけた。

もう一つの目的は、山人への関心である。この時点での柳田の山人とは、山に住む先住民（生蕃）であり、『石神問答』はシャクジなどの由来不明の祠はその隘勇線ではないかという仮説のもと研究されている。これは、台湾の植民地用語を用いたものであり、柳田は朝鮮や台湾といった隣国との比較研究を構想していたことが分る。『石神問答』はそのために、まず日本国内の情報を集め、研究を体系化したものと考ええる。柳田は『石神問答』を『遠野物語』より先に出版することで、自らの研究方法を体系的に示し、その中で山人という仮説を提示した。そして、『遠野物語』をその後出版することで、この山人の研究の資料としようとしていたと考える。そうすることにより、柳田は自分と同じ関心を持つ在野の研究者たちに呼びかけ、山人研究の実証的証拠が出てくることを期待していた。

この二つの目的には、共通して西洋の学者への対外意識と、そこから生まれた日本という国家への意識があったと考える。『石神問答』は、この関心のもと、柳田が学問の構想を始めて明確に示した研究書であった。

しかし、『石神問答』は研究方法の提示、『遠野物語』の出版及び山人研究の実証的証拠集めという強い思いが優先されて発表したため、その研究方法や内容は不十分な点が多かった。それでも、柳田のこの研究の関心、方法は様々な学界で高い評価を受け、柳田は学界での地位を確立する。その一方、評価のほとんどは従来の民俗学的研究の視点、特に、人類学会の石崇拜の研究から行われており、柳田の目的である山人という先住民への視点への反応は得ることができなかったといえる。本来、シャクジの研究でありながら、その内容とタイトルに石神とあてたこと、あまり売れなかったことも手伝って、この書は石の研究として現在も評価を受けている部分が多い。

柳田は『石神問答』について述べた『人形とオシラ神』の中で『石神問答』のシャクの音からの結論を臆断に失っていたと述べ、昭和16年の『石神問答』再刊序の中で扱った資料の問題点をあげるなど、反省を繰り返し述べている。そして、反省を述べたうえで由来不明の祠の神の研究の重要性を説き、研究を繰り返し呼びかけてもいた。しかし、石研究の観点からの評価は覆らず、柳田がシャクジという神を本来「社・祠の神」と認識していたことは注目されないまま、現在まで『石神問答』及び由来不明の祠の研究はあまり行われていないと考える。

以上から、『石神問答』は揺籃期にあった柳田の研究が初めて単行本としてまとめられ、世の中に発表された最初の書と私は考える。柳田は『石神問答』以前から、当時の民族度的研究を行う様々な学問に学び、情報を得つつ、自らの研究を行っており、『石神問答』はその構想がまとめられたものである。そして、『石神問答』の発表をきっかけに、自らの研究を学問へと昇華させようと積極的に活動を始めたと考える。そのため、この書は柳田のたくさんの意図が盛り込まれており、一方でその思いの強さから不十分な状態で発表されてしまったといえる。この不十分さのために、『石神問答』は正確に柳田の研究の意図を伝えることができず、当時の民俗学的研究の石崇拜の視点から、その研究の視点と方法ばかり

りが評価を受けてしまい、その評価は覆らなかったと考える。しかし、『石神問答』は不十分な研究ではあるが、初期の柳田の研究の視点・方法、人脈、柳田の学問の構想を知る上で重要な書であると考ええる。

また、『石神問答』で示された山人の仮説や、実質的証拠への期待、対外意識は『遠野物語』の研究でも重要なものであった。『石神問答』の観点から見た場合、『遠野物語』は山中の山人の仮説の証拠である口碑を集めた資料であったと考える。

おわりに

本論文の反省点として、『石神問答』全体に関する考察に重点をおいたため、広く浅い考察に止まったことがあげられる。また、本論文では人類学会や考古学会などの学界とのつながりの観点に重点をおいて研究しており、緒方小太郎の書簡に見える国学の観点での考察を行っていない。しかし、緒方の項で指摘したように、研究の当初から柳田には国学への視点が存在していることは明白であり、この視点からの研究の必要があると考える。

この研究を行うにあたり、様々な視点から意見や考察をくださった中村一基先生をはじめとする岩手大学大学院国語教育専修の先生方、遠野物語ゼミナールに参加した際温かく迎えてくださった高柳俊郎先生を始めとする遠野物語研究所のみなさん、『郷土研究』の観点から共に考察を行ってきた後輩の及川智佳とふらふらしている私と共に笑い励まして下さった同期、後輩のみなさまに心から感謝申しあげる。